

第6回 Real minor scaleの世界③

これまでは、借用コードとセカンダリードミナントにReal minor scale systemを適応させる考え方を示してきました。この用い方だと、初めにある程度のコードブロックが想定されてそこに借用、及びセカンダリードミナントを挿入させるという「概ねの型枠」がある上でのコードワークスになっていました。もっと型に囚われずに真に自由な転調とコードワークスのためには「Advanced chord progression」を習得する必要があります。

Advanced chord progression

この「応用コード進行」を習得する前に、今一度「基礎コード進行=Basic chord progression」を確認しましょう。

Basic chord progression

Diatonic dominant motion(P4進行)

Scale tone motion(となりへ進行=上下2度)

Functional motion(下3度進行)

Resistive motion(上3度とメジャーコード絡みの5度進行)

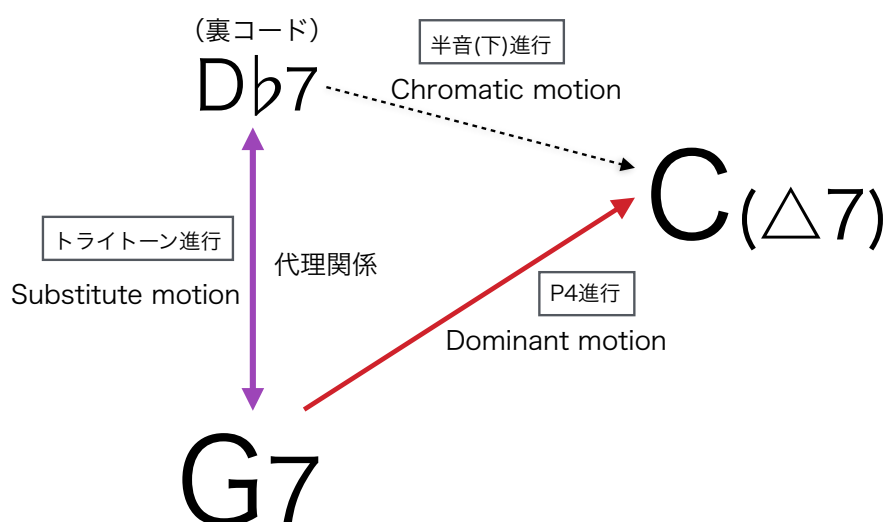
Basic chord progressionの基本はD7C(及びIII7)を用いた進行です。対してこれから学ぶAdvanced chord progressionはD7Cの枠に囚われないコード進行となります。そして実践においてはAdvanced chord progressionを適応させることでほぼ「Keyから離脱=OUT」することになります。これはミクロでの転調状態とも言えますが、特にReal minor scale systemはKey感覚がとても希薄なので行き先のKeyが確定されない「アウトしている」状態となります。

三位一体のAdvanced chord progression

Advanced chord progressionは次の3つになります

- ・ Perfect dominant motion (P4進行)
- ・ Substitute motion (トライトーン進行)
- ・ Chromatic motion (半音進行)

これら3つのコード進行は三位一体の密接な関係を持ちます。
Advanced chord progressionの概略イメージを図にしてみました。



G7→CΔ7は言わずもがなのDiatonic dominant motionのP4進行です。G7はドミナントコードなので同等の代理コードであるD♭7を持ちます。なのでD♭7→CΔ7はG7→CΔ7と同質のコード進行となります。すなわち、P4進行である**Dominant motionは半音(下)進行(Chromatic motion)と同じ**であるとみなすことができます。そして代理関係同士のコードは進行することもでき、これをSubstitute motion=代理(トライトーン)進行といいます。

代理進行をハブにしてP4進行と半音(下)進行が関連付けられているのがわかります。

これはあくまでも概略イメージです。

これから学ぶ「Perfect dominant motion」「Substitute motion」「Chromatic motion」は概略イメージを超えた非常に自由度の高いコード進行です。

Perfect dominant motion (PDM)

【基本定義】

コード同型、または同スケールでのP4進行。

繰り返すことにより元Keyからどんどんアウトしていきます。同時に十分アウトの状態からは逆に元Keyへと戻ることになります。ドミナントコードにて、特にLydian7thの7(9,13)とAlteredの7(#9♭13)がよく使われます。

Lydian7th 7(9 13)

C₇^(9 13) F₇^(9 13) B₇^(9 13) E₇^(9 13) A₇^(9 13) D₇^(9 13) G₇^(9 13) B₇^(9 13) E₇^(9 13) A₇^(9 13) D₇^(9 13) G₇^(9 13)

Altered 7(#9 ♭13)

C₇^(#9 ♭13) F₇^(#9 ♭13) B₇^(#9 ♭13) E₇^(#9 ♭13) A₇^(#9 ♭13) D₇^(#9 ♭13) G₇^(#9 ♭13) B₇^(#9 ♭13) E₇^(#9 ♭13) A₇^(#9 ♭13) D₇^(#9 ♭13) G₇^(#9 ♭13)

PDMは△7コード、m7コードでも使われます。それぞれスケールは圧倒的にLydian、Dorianで使われます。

Lydian △7(9)

C_{△7}⁽⁹⁾ F_{△7}⁽⁹⁾ B_{△7}⁽⁹⁾ E_{△7}⁽⁹⁾ A_{△7}⁽⁹⁾ D_{△7}⁽⁹⁾ G_{△7}⁽⁹⁾ B_{△7}⁽⁹⁾ E_{△7}⁽⁹⁾ A_{△7}⁽⁹⁾ D_{△7}⁽⁹⁾ G_{△7}⁽⁹⁾

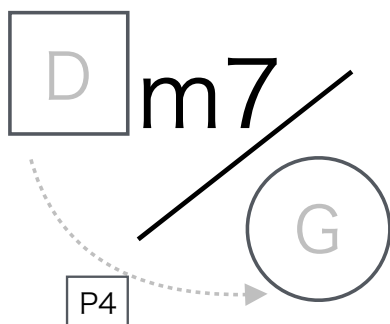
Dorian m7(9)

C_{m7}⁽⁹⁾ F_{m7}⁽⁹⁾ B_{m7}⁽⁹⁾ E_{m7}⁽⁹⁾ A_{m7}⁽⁹⁾ D_{m7}⁽⁹⁾ F_{m7}⁽⁹⁾ B_{m7}⁽⁹⁾ E_{m7}⁽⁹⁾ A_{m7}⁽⁹⁾ D_{m7}⁽⁹⁾ G_{m7}⁽⁹⁾

【重要】ダブルストラクチャーコードのPDM

Dm7/Gに代表されるコードは本来のコードネームを分数コードに簡略表記した「ダブルストラクチャーコード」と呼ばれます。これはMixolydian、Dorian、Aeolianから同じ形に作られるコードなのでそれだけPIVOTコードとして使いやすく、転調のきっかけ、または転調から戻るときに非常に有効です。

ダブルストラクチャーコード



1. Mixolydianから $V7sus4(9) = \text{IIIm7/V}$
2. Dorianから $\text{IIIm7}(9\ 11) = \text{VIIm7/II}$
3. Aeolianから $\text{VIIm7}(9\ 11) = \text{IIIIm7/VI}$

コード型からだけでは3つのスケールのどれが使われているのかはわからない。コード進行の前後関係からスケール判断することになるが、逆手にとって対応スケールを曖昧にして自由転調のきっかけを作りやすくすることも出来る。

【PDMの発展】

「ルートさえP4に進行していればコードクオリティはなんでも良い」という発展的な解釈があります。これは単に「Dominant motion」の広義と一致します。コード進行の王道がDominant motionです。しっかりとキーボード練習で弾けるようになってください。

Substitute motion(Sub.M)とChromatic motion(Ch.M)

Real minor scale systemのVII : AlteredとIV : Lydian7thは完全な代理関係の対応コードを持ちます。

: r.mC

B_Altered (r.mVII) F_Lydian7th (r.mIV)

p.34で示したLydian7thでのPDMで、一つ飛ばしで代理コードで変換してみるとChromatic motionが現れてきます。

Perfect dominant motion

代理

代理

代理

代理

代理

代理

Chromatic motion (下降形)

Substitute motion (代理[トライトーン]進行)

第3回目p.16にて「ドミナントコードの特権：代理コード」の詳細説明をしています。

基本はルートがトライトーン離れた2つのドミナントコード同士の関係を代理コード(裏コード)といますが、ここから発展的な進行も考えられます。

【Sub.Mの発展】

「ルートさえトライトーン先に進行していればコードクオリティはなんでも良い」という発展的な解釈があります。

Chromatic motion (半音進行)

PDMとSub.Mからの関連で導き出されたChromatic motionですが、関連付いているのは「下降形」です。もちろん「上行形」も含まれますが、下降形に比べると進行しづらくなっています。この原因はもう少し経ってから説明いたします。

基本定義では「同じクオリティのコードによる半音進行」となりますが、これも発展的に「ルートさえ半音先に進行していればコードクオリティはなんでも良い」となりますが、

- ・下降形が進行しやすい
- ・コードは同じクオリティでの進行

これを押さえておいてください。

【6Ex-etude1】

The exercise shows a sequence of chords in G major: C⁽⁹⁾Δ7, G^(#9 ♭13)7, F⁽⁹⁾Δ7, E^(#9 ♭13)7, B^(9 13)7, A⁽⁹⁾m7, E⁽⁹⁾7, D⁽⁹⁾m7, D^(#9 ♭13)7, and G^(9 13)7. The progression is annotated with 'Sub.M 発展' (blue arrows), 'Ch.M 下降' (purple arrows), 'STM', and 'DDM'. The musical notation shows the chords in both treble and bass clefs, with the bass line moving chromatically downwards.